

実践的な英語力の育成を目指して

附属函館中学校 宮野 健, 五嶋春奈

I はじめに

平成 25 年 4 月に中央教育審議会から発出された答申「第 2 期教育振興基本計画について（答申）」において、第 1 期計画の評価から我が国の教育の現状と課題が挙げられており、義務教育段階の課題としては、『新学習指導要領の目指す「確かな学力」に照らし、いまだ多くの課題を抱えるものと言わざるを得ない』と総括されている。¹⁾

また、「新学習指導要領の趣旨の実現に向けた教育活動の充実のため、各学校における教育環境整備の推進や全国学力・学習状況調査の結果等を踏まえた指導方法の改善の提案など一層のきめ細かい支援が求められる」とされ、今後 5 年間に実施すべき教育上の方策が示された。

その方策が示す 4 つの基本的方向性の一つとして、グローバル社会において各分野を牽引できるような人材「未来への飛躍を実現する人材」を養成することが示され、グローバル社会の中で特に求められる力として、国境を越えて人々と共同するための英語等の語学力・コミュニケーション能力が重要視されている。そして、基本的方向性と同時にそれらに基づく成果目標として、学習指導要領に基づき達成される英語力の目標が具体的に示された（中学校卒業段階：英検 3 級程度以上を達成した中学生の割合 50%）。

本校の生徒の実態として、英語検定などの資格取得に熱心に取り組む者はいるものの、中学校卒業段階で英検 3 級以上を達成する割合は半数を超えてはいない。また、ここ数年 4 月に行っている中学 2 年生対象の CRT 検査の結果からは、観点別では「外国語理解の能力」が、領域別では「読むこと」が全国比で低い状況にあることが分かっている。

そこで、今次の研究では思考・判断・表現と密接にかかわりをもつ言語活動である「読むこと」を中心とした学習指導を工夫し、「学習指導要領に定められた目標」を言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の育成と捉え研究を進めていく。また、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定することにより、学習指導要領の内容を踏まえた指導方法や評価方法の工夫・改善を行う。これによって、中学校段階から実践的な英語力の育成を目指していきたいと考えている。

II 研究の経過

本科では、国立教育政策研究所からの指定を受け、「新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究（外国語）」というテーマのもと、平成 21・22 年度教育課程研究指定校事業を実施し、「コミュニケーション能力の素地を踏まえた中学校での学習指導の工夫 ―第 1 学年における年間指導計画の作成と教材開発を通して―」という研究主題を設定し研究を進めた。

平成 23 年度からの 2 年間は、本校が国立教育政策研究所から「学習評価に関する研究指定校事業」として指定され、「学習指導要領に定められた目標等の実現状況を把握するための評価方法についての研究開発」

という学校研究テーマで研究を進めてきた。昨年度までの2年間、本科では「生徒一人一人の学習状況を的確に把握する評価方法の研究」をテーマに、「話すこと」「書くこと」の学習指導の工夫および評価方法の研究に取り組んだ。具体的には、授業時数増を生かして「話すこと」「書くこと」中心の「発表活動」を年間指導計画に組み込んだことと、ICT機器などを利用したパフォーマンス課題を取り入れた評価方法の工夫によって、これまでより一人一人の学習状況を把握できるようになった。

しかし、日常的な授業の中でも妥当性・信頼性を保証する評価基準の保管に足りうる事例の収集・検討が今後も継続して必要であり、そのための作業の効率化の努力や方法の開発は継続されていくべきだということが課題として残った。

Ⅲ 本年度の研究

1. 本校研究との関連について

今年度の本校研究主題に関わり、本科としては実践的な英語力を高めることによって、本校の研究主題である21世紀型の学力を育成し、未来への飛躍を実現する人材を育てていくことになる。本校では、実践的な英語力を「効果的にコミュニケーションを図ることができる能力」ととらえている。これは、昨今英語をはじめとする外国語教育の強化が叫ばれている中、グローバル人材を育成する観点からいくつかの提言などで述べられている英語力を簡潔に表したものである。

また、新学習指導要領との関連で言えば、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」では、「新学習指導要領で目指す外国語能力は、グローバル社会に求められる外国語能力とその考え方において軌を一にするものでもあり、新学習指導要領を着実に推進することが我が国の国民の外国語能力を向上させるための基本となる」と述べられている。²⁾そこで、この提言にもある通り、新学習指導要領の趣旨を生かすために改善事項を踏まえた研究を鋭意進めていくことが、ひいては実践的な英語力の育成につながると思った。

2. 教科研究仮説について

教科研究仮説を設定するに当たって、本校英語科の実態を中学2年生対象の標準学力検査の結果から探った。その結果、観点別の得点率を全国と比べると「外国語理解の能力」が一番低いことがわかった。また、同検査の前年の結果と比べると、この観点の領域では「読むこと」に課題が見られることも分かった。ただ、この課題は、現2年生に限ったことではなく他の学年にも当てはまると思われる。全国的に見ても似たような傾向があり、新学習指導要領が実施されてから1年がたった今、これからの課題として次の4点が挙げられている。³⁾

- ① 単元構想をどうするか
- ② 読むことの指導をどう充実させるか
- ③ 言語活動をどう工夫するか
- ④ 小学校や高等学校との連携をどう生かすか

そこで、本科及び中学校外国語科で課題となっている外国語理解の能力の「読むこと」の学習指導を工夫し、基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る言語活動を充実させることにより、思考力・判断力・表現力を高めることができるとともに、その後の学習指導の改善、充実につながっていくと考え、本研究主題と次に示す教科研究仮説を設定した。

教科研究仮説

課題となっている「読むこと」の学習活動において、生徒が思考・判断する場面を活動の中に取り入れる指導を充実することによって、知識・技能を活用する力を育むことができる。

IV 研究の内容

1. 「読むこと」の目的に着目した指導

新学習指導要領においては、自らの考えなどを相手に伝えるための発信力やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成が重視されている。これらの観点から、聞くことや読むことを通じて獲得した知識等について、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、話すことや書くことを通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成する指導を充実することが求められている。

また、平成24年度から新教育課程が導入されたことにより、中学校外国語科の指導はこれまでと大きく変化しており、授業時数が増えたこと、いわゆる指導する語数を1200語程度までと教科書が全面改訂されたこと、そして外国語活動を通して育成されたコミュニケーション能力の素地を生かした指導を工夫することが挙げられる。特に、授業時数が増えたことで指導する中身の充実が求められており、各校で課題となっているところを補い厚く指導することが重視されている。

これまでの本科の研究では、新学習指導要領を踏まえた指導改善の方向性として、4領域のバランスを意識しながらも読むことを起点とした指導実践が少なかったと言わざるを得ない。また、一般にリーディングには、① reading for language, ② reading for understanding, ③ reading for pleasure という3種類があるとされているが、本科では①に大きなウェイトを置いていたことにより、リーディングの質も量も十分ではなく、その結果が生徒の実態につながっていると思われる。これまでも、本文の内容を理解するためにヒントとなるキーワードを与えたり、オーラルイントロダクションを工夫したり、視聴覚教材を利用するなどしてきたが、教師がコントロールする場面が多く生徒が主体的に読むことの言語活動に取り組んでいたとは言い難い。

そこで、単元構想の段階で教科書本文を活用した読み方の指導に工夫を加えた。具体的には、教科書本文を読む活動の目的を問題解決的な学習ととらえ、「そのために読む」という方向に改善していくようにした。その際、教科書本文の内容を理解するだけでなく、現在使用している教科書の旧版の教科書を用いて該当ページに当たる本文を新たな情報を含む英文として投げ込み教材的に活用することにした。

本校で使用している教科書の現版と旧版では、登場人物の構成やテーマ、そしていわゆる5W1Hに当たる部分が微妙に違っており、その違いを見つけさせることは自然にスキミングをすることにつながる。つまり、両者を対比させることによって全体を俯瞰することになり、生徒が着目するリーディングのポイントが自然に5W1Hに向かうようになる。また、両者の教材には適度な難易度があるため上位層にも手応えがあり、現版を参照すると理解できるため下位層にとっても比較的取り組みやすい。現版と旧版の2種類を読むことによってリーディングの量が倍増し、これまでより時間が多くかかることになるが、この点については授業時数増の利点を生かす視点をもって取り組んでいく。

そして、それぞれの内容についてのQ&Aを解くことで理解を深めさせる。Qは平易なYes/No Qsから特殊疑問文まで設定し、現版と旧版の異なっている部分についてのQを多くすることでスキミングを生かせるようにする。

このように、読む目的をこれまで以上に生徒に意識させることで指導の改善を図っていく。

2. 実践的な英語力を目指した CAN-DO リストの作成

本研究主題でもある実践的な英語力の育成に関して、生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証するための具体的施策として、CAN-DO リストの形で設定するとともに、その達成状況を把握することが示された。「英語で何ができるか」を記述したものを CAN-DO ディスクリプタと呼んだり、CAN-DO ステイトメントと呼んだりするが、そのリストが CAN-DO リストである。

前項で教科書本文を中心にリーディングの質や量を充実させていくことに言及したが、ともすれば教科書を教えることで最終的にどのような生徒を育てるかということをおぼろげになってしまいがちになってしまう。CAN-DO リストの開発では、教科書で教えて生徒が何をできるようになるのかが問われることになる。

そこで、本科における CAN-DO リストを作成し、日々の授業を通して身につけた知識や技能を活用して、生徒が英語で何をできるようになるかを意識した指導を行うように努めた。このリストの作成に当たっては、「各中・高等学校の外国語教育における CAN-DO リストの形での学習到達目標設定のための手引き (以下、手引き)」を参考にした。⁴⁾

以下は、中学3年終了時における到達目標である。

読むこと

- ・平易な語で書かれた短いストーリーなどの文章を読み、その概要を理解することができる。

聞くこと

- ・いくつかの情報が混在する対話などを聞いて、キーとなる情報を正確に聞き取ることができる。

話すこと

- ・与えられたテーマから選択して自分の意見を述べたり、相手の発話に対して適切に応答したりすることができる。

書くこと

- ・与えられたテーマについて辞書等を用いて簡単な文章を書くことができる。

参考となる外部検定試験

- ・英検3級または準2級程度

以下は、中学2年終了時における到達目標である。

読むこと

- ・平易な語で書かれた手紙や電子メールなどを読み、その概要を理解することができる。

聞くこと

- ・混同する情報が少ない平易な英文を聞いて、キーとなる情報を正確に聞き取ることができる。

話すこと

- ・簡単な語や基礎的な表現を用いて自分に関することを相手に伝えることができる。
- ・簡単な語や基礎的な表現を用いて相手に質問したり質問に答えたりすることができる。

書くこと

- ・聞いたり読んだりしてわかったことについて短い文章で書くことができる。

参考となる外部検定試験

- ・英検4級または3級程度

以下は、中学1年終了時における到達目標である。

読むこと

- ・平易な語で書かれたサインや指示などを読み、理解することができる。

聞くこと

- ・平易な英語で書かれたメッセージや指示などを聞いて、内容を理解することができる。

話すこと

- ・与えられたキーワードをもとに、ある人物や事象について言いたいことを表現することができる。

書くこと

- ・趣味や好き嫌いなど自分のことについて、簡単な語や基礎的な表現を用いて英文を書くことができる。

参考となる外部検定試験

- ・英検5級または4級程度

手引きによると、この CAN-DO ディスクリプタがあまり細かいと、それをより具体的に反映させる年間指導計画及び単元計画の作成が難しくなることから、学習指導要領で示されている外国語科の内容における表現の程度にとどめている。そして、今次研究テーマである「読むこと」の学習到達目標を意識した指導と評価を行うことにした。

3. ICT 機器を活用した取組

本科での教育メディアを活用した学習指導に関連し、授業時間内に視聴覚機器を使用して教科書デジタル教材やオンデマンド教材などの教材を具体化して、生徒にとって身近なものとしてとらえられるようにしてきた。しかし、実践的な英語力の育成を考えたときに、授業時間外でも生徒が自分の学習の進度に合わせて自主的に活用できる教材も工夫する必要があるのではないかと考えた。

そこで、教職員の共通理解のもと学校全体の取組として、タブレットPCを用いた授業時間外での英語学習を取り入れた。これは、週に1度、短縮授業で生み出された時間を利用して授業終了後の短学活の時間に全校一斉に行う。その内容は、単語の発音を聞いて意味を答えたり、英語で読まれた文を聞き取って1語ずつ再生したりしていくものである。レベル別に分かれているため、個々の進度に合わせて取り組むことができる。リスニングの学習がメインになるが、生徒たちはこの学習の大切さを理解しており集中して取り組んでいる。

本取組の成果と課題については、今後継続して取り組む中で検証し、次年度以降にデータ等を用いて紹介できればと考えている。

V 研究仮説に基づく実践例（第2学年）

1. 題材名

Unit3 My Future Job Reading for Communication ウェブページで意見を交換しよう

2. 実践の概要



このユニットは主人公が将来就きたい職業に関して話をしたり、ウェブページ上に掲載されている職業についての様々な意見を読んだりするという内容である。自分のしたいことや目的を説明する文として、不定詞の3用法（名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法）を含む英文がユニットを通して多く用いられている。

本実践では、思考・判断・表現に密接にかかわりをもつ言語活動である「読むこと」に重きを置き、教科書本文の内容を理解させた後に内容が少し異なる文章を提示し、両者の違いを把握させるスキミングへとつなげる活動に取り組みさせた。また、コミュニケーションにつなげるために内容に関する Q&A を付加した。その際、「意味を捉えながら読む」ことにも注意させた。通常の音読練習では、どうしても発音にばかり意識が集中し空読みになってしまうが、「意味を捉えながら読む」ことを意識させることで、その後の内容理解が深まるようにした。

3. 指導計画（6時間扱い）

題材	主な指導目標	主な学習活動	時間	基礎的・汎用的能力
Reading for Communication	<ul style="list-style-type: none"> 不定詞の3用法を含む文章を読み、内容について正確に読み取ることができる。 書かれた内容についての質問に英語で答えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 不定詞の3用法を含む英文を読んで、内容に関する質問に文章で答える。(ペアワーク) 	2 (本時 2/2)	【人間関係形成・社会形成能力】

4. 本時案（2/2）

学習活動	教師の働きかけ	留意点等
<ul style="list-style-type: none"> ウォームアップ 前時の復習 Vocabulary and Key phrase check を行う 本時の課題を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> 日常的な挨拶を行う 前時の復習 前時で扱った基本表現を使い、ディクテーションを行わせる 本時の課題を提示し意識させる 	<ul style="list-style-type: none"> 雰囲気をもたせる 
不定詞の用法に注意してウェブ掲示板の意見を読み内容を理解しよう。		全体での復習の様子
<ul style="list-style-type: none"> 教科書本文とワークシートの文の異なる点にアンダーラインする モデルにならってワークシートの文を音読する 内容についてペアで Q&A を行う 今日の取組について自己評価をする 次時の学習内容を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書本文とワークシートの文を対比させスキミングをさせる 意味のまとまりに注意しながら音読できるようにモデルを与える 音読終了後、ペアでワークシートの文に関する Q&A を行わせる 今日の取組を振り返らせる 次時の学習内容を伝える 	 <p>ペアワークの様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークシートによる評価 自己評価

VI 仮説の検証

これまでのリーディングの指導では、5W1Hのポイントを押さえながらも、結果的には語句や文構造に着目して「意味を知るために読む」という活動が中心であった。本年度の取組では、知識・技能を活用する力を育むために、問題解決的な手法で思考・判断する場面を取り入れたことによって、徐々にではあるが生徒主体の「意味のあるリーディング」に変わってきている。特に、教科書本文に関連した投げ込み教材を活用することによって、読むことに新しい目的が生まれたことが大きい。

しかし、内容理解そのものがゴールになっている指導が改善されないため、本実践例では reading for understanding から reading for communication へとさらに1歩進めて、教科書本文をベースとしたコミュニケーション主体の活動を取り入れた。具体的には、内容に関する Q&A をペアワークとし、教科書本文に関する Q&A の他に旧版の教科書に関する Q&A にも挑戦させた。これによって、リーディングでスキャンした部分が Q&A に生かされるため活動が活性化された。

実践の振り返りでは、「読むことは単に和訳することだと思っていたが、全体の内容を考えながら読んで、自分の言葉で内容を言えることが大事だと分かった」や「はじめは読む量が多くなってイヤだと思っていたが、キーワードに目がいくようになってからは、あとの回答に辿り着く時間が早くなった」等の感想が書かれていた。生徒自身も知識・技能が活用できるものとして深まったことを実感しているものと考えられる。

このように、基礎的・基本的な知識や技能を活用した問題解決的な学習の工夫による指導は、本科におけるこれまでの reading for language から reading for understanding へ、そして reading for communication へと変容が見られることから、課題となっている「読むこと」の学習指導においても有効であることが分かった。

VII 成果と課題（これまでの実践をふり返って）

グローバル時代にあつては、英語を使った情報のやり取りやコミュニケーションがかつてない規模で日常的に行われている。以前とは違い、テキストの量が増大し質が多様化しており、読んで理解したら終わりではなく、読んだことに基づいて他者とコミュニケーションをとる必要がある。教室でのリーディング指導における重点もこのような方向に変化してきており、本科でも内容理解にとどまらずにコミュニケーションにつながるリーディング指導を構想できたことが、これまでの実践の成果として挙げられる。

また、CAN-DO リストを作成したことにより、教科書を教えるのではなく、生徒がどんなことができるようになるか、生徒にどんな力を身につけさせたいかをこれまでより意識するようになった。その結果、定期テストにおける「初見のテキスト」によるリーディングの問題の回答状況に変化が見られた。具体的には、文章の概要把握や全体として書かれている内容を把握する力が育ったかどうかを測るのにふさわしい初見テキストの無回答がなくなり、5W1H を問う設問に対しても正答から著しくかけ離れた誤答が減少した。今後、英検や標準学力検査等の外部試験にも効果が表れることを期待したいところである。

一方、読むことで得た知識等について自らの体験や考えなどと結びつけながら活用する力の育成については十分とは言えず、研究実践を継続し検証していくべき課題がいくつも残った。また、CAN-DO リストの形で設定した学習到達目標については、生徒が身に付ける能力を明確にすること、4技能を総合的に育成する指導につなげること、そして教員と生徒が外国語学習の目標を共有できるように改善を図っていかねばならない。ICT 機器を活用した英語学習については、学校全体として取り組んでいかねばならない課題でもあり、今後時間をかけて指導していく中で検証していく必要がある。

Ⅷ おわりに

平成 25 年 4 月 8 日、第二次安倍政権における自民党の教育再生実行本部から、5 月 28 日には政府の教育再生実行会議から、それぞれ英語教育に関して様々な提言が出された。中でも英語教育界では、小学校の英語学習の抜本的拡充など初等中等教育を通じた系統的な英語教育、そして大学入試についてセンター試験廃止の検討、かわって TOEFL などの英語能力判定試験の導入、という 2 つが大きな話題となっている。今まさに英語をはじめとする日本の外国語教育について大きな変革が近づいていると言っても過言ではない。

新しい学習指導要領が実施されてわずか 2 年もたたない中で、私たち中学校の英語教師はこのような英語教育改革の渦に飲み込まれている。今後も英語教育に関してどのような施策が進められていくか注視していかなければならないが、まずはしっかりと地に足をつけて新学習指導要領の趣旨を踏まえた指導を実践していきたい。そして、前述した成果と課題をきちんと踏まえ、実践的な英語力の育成の育成を図る学習指導を工夫し、それがひいては本校が目指す 21 世紀型の学力の育成につながるよう、今後も研鑽を積んでいきたいと考えている。

(文責 宮野 健)

<引用文献>

- 1) 中央教育審議会（平成 25 年 6 月 14 日）「教育振興基本計画」
- 2) 文部科学省（2010）「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」
- 3) 日本英語検定協会（2013）「英語情報 4・5 月号」18～19 頁
- 4) 文部科学省（2013）「各中・高等学校の外国語教育における CAN-DO リストの形での学習到達目標設定のための手引き」

<参考文献>

- ・中学校学習指導要領解説 外国語編（平成 20 年 9 月）文部科学省
- ・『教職研修 9 月号』（2013）教育開発研究所
- ・『指導と評価 10 月号』（2013）図書文化
- ・投野由紀夫（編）『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』（2013）大修館